

学校名が筑紫(ちくし)丘高校に対して、校歌の一節に「筑紫(ちくし)国原」とあります。「ちくし」と「つくし」。以前から気になっていましたので、この機会に本棚から関連しそうな本を引っ張りだして調べてみました。

まず、学研の「漢和大辞典」(藤堂明保編)で、「筑」を引くと、音読み「チク」とあるだけで、「ツク」は載っていません。例題としても「筑前(チクゼン)」「筑後(チクゴ)」が紹介してあるのみ。この延長上でみれば「ちくし」が正しいということになりましょう。

しかし、「広辞苑」(新村出編)は「つくし」の漢字に「筑紫」を充てていて、別に「ちくし」を引くと、該当の漢字が見当た

中15回生の会報「十五夜風声」継続30年に幕 37人が惜別の文



タブロイドのころの「十五夜風声」

「博多は懐かし。みんなどげんしよるとかいな」の思いをちりばめた中15回生の会報「十五夜(や)風声」(A4判)が、30年間も続いて今年1月休刊した。頽齡(たいれい)80歳を迎えていて、50歳の時にスタートした「継続は力なり」を地でいった。

15回生は昭和16年、太平洋

たりません。「広辞苑」はどういう意図が分かりませんが、「ちくし」という表現を認めていないのです。「筑紫」は記紀にも登場しますが、「古事記」(倉野憲司校注、岩波文庫)には「次に筑紫嶋を生みき」、「日本書紀」(原本現代訳、山田宗陸著、教育社)にも「つぎに筑紫洲を生んだ」とあります。ともにルビがふつてありますが、前者が「つくし」で、後者は「ちくし」です。

倉野氏は古事記の専門家で、「万葉集」に「都久紫(巻五、八六六)と書かれ、古くから「つくし」と読まれてきたことを重視されたのではないのでしょうか。一方の山田氏は哲学者で、この現代訳では地名を九州に比定するなど独自の解釈もなされており、地元の「ちくし」を採用したと思わ

れます。全体として専門書の多くは「つくし」とし、「ちくし」は現地音(方言)で、しかも新しい呼称という見方がなされています。郷土史家の故筑紫豊さん(彼の苗字は「ちくし」)さえ「つくし」説で、著作で渡り口の「つ(津)」と、突き

ちくしかつくしか

出した地形を表す「串(くし)」が合わさった「津串(つくし)」が語源と述べられています。しかし、本当に今ではまったくと言っていいほど使われない「つくし」が古く、「ちくし」がのちに生まれた現地音(方言)なのでしょうか。邪馬台国論争の過程で、九州王朝説(近畿王朝と並行し

て九州王朝があった)と唱えている古田武彦氏は「邪馬(やま)い(ち)こく」の証明の中で、「万葉集」などより古い中国の「隋書」に「隋使は又、竹斯国に至る」とある点に注目。「隋使が」現地名を表音記したものだ。現地ではすでに「チクシ」と発音していたのである」と記しています。ただし、古田氏は「つくし」も否定せず、「チ(美しい)クシ(現地の人の呼称)と、「ツ(津のある)クシ(他地域の人の呼称)の両方があり、「筑紫」都久紫の漢字が充てられたと書いておられます。これに従えば「筑紫」を「ちくし」

と「つくし」と二通りに呼ぶことが古代から、現代まで続いていることになりました。「ちくし」も「つくし」も同じ様に古い呼称ということができます。ちなみに日本全体の中、特に関東の人たちに「つくし」音が強いように思われます。だが言ったか忘れましたが、彼らの誰も知っていないのが筑波(つくば)山です。その音に影響されているというのです。「筑」という漢字を普段から「つく」と読んでおり、「筑紫」も「つくし」と言ってしまうわけです。古田説に立てば「ちくし」と「つくし」がいがみ合うことなく、つまり、校名と校歌の一節も「矛盾」なく説明できます。校名の筑紫丘は「ちくし」で正しい。なぜならそれは古

くからの「現地の人の呼称」であるからです。また、校歌の「筑紫国原」も「つくし」で同様に正しい。作詞者の高木市之助氏は著名な万葉学者で、確信を持って「つくし」とされたと思いますが、彼が名古屋出身とすれば「他地域の人の呼称」と言えなくもありません。専門書に多い「筑紫」は本来「つくし」と読み、「ちくし」は新しい現地音とする説が必ずしも正しくない、つまり「ちくし」も「つくし」と同じような正当な読み方であるということが分かっていただけたでしょうか。せめて「広辞苑」は「つくし」と同時に「ちくし」も載せてもらいたいものです。もとより素人の論で、ご異論がございましたら指摘ください。(高13 保坂晃孝)

今年で19回を数えるが40代を境に「若武者の部」「古武士の部」、更に「早乙女の部」と、3部門に分かれて覇を競う本大会には、新春にふさわしく優勝者には「ペー」温泉宿泊券」という豪華賞品が付与されるため、この時はばかりは段位や年齢、先輩後輩の序列など一切関係なしの熾烈なバトルが繰り広げられ、正月の風物詩となっている。剣道の魅力は何と云っても年齢に関係なく、若者に交じって剣を交えることが出来る事に尽きる。かく申す筆者も本年71歳。まだまだ後輩殿には引け取らぬぞの心意気で、道場通いを楽しんでいる。(OB会長・古賀勝)

戦争勃発の年に入学したが、黒帽は戦闘帽に変わり、軍需工場への学徒動員、遊郭の肥を汲み取り、大八車で農家に運ぶ作業までした。4年で卒業し、それだけに座標軸を共有する思いは強く、身辺雑記から心の琴線に触れる亡友の追憶、戦争の語り部など多岐に。最終記念号と題した30号は、37人の惜別の文で埋まる。なかには不自由な体にな筆で文を。

題字の「十五夜風声」は、彫刻家小田部泰久さんの筆。昭和49年ごろまで東中洲で同期生の家族が開く料理店に15日夕、数人が集まっていた。



老いて盛んな剣道部OB会

「好きと上手と巧さを比べれば、好きが一番」こんな愛剣家が集う剣道部OB会。83歳の高齢(中12)でありながら、今もって現役高校生を相手に剣を交える怪物先輩を頭に、角正武範士八段(高14)を含めて60代以上

はつちゃんて同期会 高37回、新年に集う 平成21年1月3日、同期の橋本憲吾君の店「中華はつちゃん」で、高37回の新年会をしました。参加者は他県からの帰省組も含む28名。今年には恩師の石川修一先生、栗崎堅先生、吉村和彦先生にもおいで頂き、はつちゃんが腕をふるったおいしい料理に話も弾んで、賑やかな楽しい会になりました。学年全体としての集まりは長らく開いておらず、先の80周年を機に集まり始めて2年目ですが、毎年の定例会として、途切れていた同期の繋がりを少しずつ取り戻したいと思っています。同窓の繋がりと云うのは、やはり不思議な力があって、長く離れ、お互いの顔がよく分からなくなっている、会えは懐かしく打ち解けることが出来ます。在校中には話したこともなかった男クラの人とも、やっぱり同じ筑高の時間と空気を共有していたんだなあ、と感じたりもしました。(第37回 三浦)

三十路迎え同窓会 高49回生160人 平成21年1月2日、福岡市の西鉄ランドホテルで高49回生学年同窓会を開催、160名が集まりました。私たちにとっては三十路を迎えた一つの区切りとしての同窓会であり、当時の恩師をはじめ田中義明同窓会長、城戸英敏校長にも来賓としてお越し頂いたことに、改めて御礼申し上げるところです。笑いの絶えない楽しい2時間間はあっという間。全員による校歌・応援歌の合唱で迎えたフィナーレは、もはや当代の恒例行事になりました。今回の同窓会の開催にあたっては、各クラス2名ずつのクラス幹事に協力を仰ぎ、クラス幹事も半年間で4回開催。同窓会名簿が充実したのものになったことは言うまでもなく、各クラス幹事が一丸となって名簿収集や情報伝達を行う「仕組み作り」ができたことは最大の収穫でした。(第49回常任幹事 田中慎介)

同期生の出版本寄贈 「愚直の歩み」など4冊 三坂一生氏(中18・常任幹事)から同期生が出版した本を同窓会事務局にご寄贈いただきました。本は、同窓生の活躍の一端を語る絶好の記録と言えます。本を出版された方、是非お知らせください。そして事務局に一冊ご寄贈いただきたいと思います。

▽「愚直の歩み(航空機部品等トラブル究明の44年)」浅山行昭著(中18・高1・朝日新聞名古屋本社編集制作センター刊)

▽「日之神の岩刻図と巳族文書」大西詔治著(中18・高1・早稲田出版社)

▽「韓国の鉄道」中島廣・共著(中18・高1・JTB刊)

▽「韓国鉄道の旅」中島廣・共著(中18・高1・JTB刊) (事務局)

訂正 第44号3頁の「大王の遠征」に奨励賞の記事14行目「同期の美術家内山重太郎さん」は「同期の美術家山内重太郎さん」の誤りでした。訂正してお詫びします。